

主催 かわさき市民アカデミー

SDGs フォーラム オンライン

コロナ-これからの 時代を生き抜くには

参加費 無料
事前申込 受付中
9/10(金) 13時締切

開催日 2021年9月11日(土) 13時~16時30分

(公財)東京応化科学技術振興財団助成事業

第1部 基調講演 「コロナ-これからの時代を生き抜くには」

講師 国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室室長

五箇 公一先生

第2部 シンポジウム

シンポジスト

五箇 公一先生(国立環境研究所 生態リスク評価・対策研究室室長)

黒木 登志夫先生(東京大学名誉教授、元岐阜大学学長)

宇野 重規先生(東京大学教授、かわさき市民アカデミー政治・社会コーディネーター)

伊藤 和良先生(元川崎市経済労働局長、地域協働講座企業連携講座コーディネーター)

コーディネーター

太田 猛彦先生(東京大学名誉教授、かわさき市民アカデミー学長)

★ 先生方は、全員オンラインでのご登壇となります。

申込方法

受講希望の方は、『かわさき市民アカデミーホームページ』の特別講座からお申込みください。



問い合わせ先 かわさき市民アカデミーSDGsフォーラム実行委員会

住所：川崎市中原区今井南町 28-41 電話:044-733-5590(平日 10時~16時) FAX:044-722-5761

ご登壇者著書ご紹介



五箇 公一

『これからの時代を生き抜くための生物学入門』 辰巳出版

外来種は目の敵にされるが、スズメも稲作の到来とともにやってきたらしい。緑豊かな北海道の牧草地は外来種の草原だ。人間は野山に手を入れ維持管理することで自然と共生してきた。手つかずなら日本の山林は暗いブナの森、我々が住むには厳しい。里山の放置は好ましくないが、江戸時代のような状態を求めるのも極端だ。考えさせられるのは、人間は自然の一部か、どこまでの行為を自然は許すか。いま、人間の営みで生物種の大量絶滅が進む。注意すべきは、それがたいしたことないのか、とても危ないのかさわからないこと。過去5回の大量絶滅があったが、生物は多様性を取り戻した。きつと次も取り戻せる。ただ、そこに人間がいるかはわからない。

我々を悩ます感染症を「目に見えない外来生物」ととらえる。その自然の猛威は「野生生物の種の中で、バランスを欠いた増殖を続ける集団」がいれば感染を拡大して個体数を調整する。

将来は、本書で議論される利他行動が取れるかにかかっているという。

—朝日新聞 書評より



黒木 登志夫

『新型コロナの科学 パンデミック、そして共生の未来へ』 中公新書

本書は、黒木先生の解析の集大成です。感染症やウイルスの基礎知識に加え、各国の対策、研究開発の状況、そして今後への提言と、膨大な情報がわかりやすくまとめられています。

…日本のこれまでの対策に対して批判もされています。人と動物の距離が近くなり、今後も新規感染症は次々に登場すると考えられます。今回の経験から学び、パンデミックに対する備えを強化しなければなりません。そのためには、健全な批判が必要です。本書からは、黒木先生の使命感がひしひしと伝わってきます。

新型コロナウイルスの状況は刻一刻と変化しています。近い将来に本書の増補版が出ることを期待しています。本書は未曾有のパンデミックの貴重な証言となることでしょう。

—山中伸弥氏 推薦の言葉より



宇野 重規

『民主主義とは何か』 講談社現代新書

民主主義は現代において多様な危機に遭遇しています。民主主義がそれを乗り越えられるかは、まだわかりません。そこで問われているのは、民主主義の力によって格差を縮小し、平等を確保することができるのか、人と政治をつなぐ新たな回路を見出すことは可能か、民主主義は真に人類が共有しうる共通の課題か、人間の人間らしさ、個人の尊厳や平等をいかに正当化できるか、そして、パンデミックのような緊急事態に民主主義は対応できるのか、といった問いです。

本書では、歴史を遡りながら、これらの問いに答えていきたいと思います。まずは民主主義という言葉の生まれた古代ギリシャです。

—序 民主主義の危機より



伊藤 和良

『スウェーデンの分権社会 地方政府ヨーテボリを事例として』 新評論

私は、ヨーテボリ市の活動を長い期間にわたってみつめてきた。それは、学問的な考察の結果を整理し理論的な方向性を示す学者の視点だけでなく、また自治体行政に迫る市民の視点とも異なる。分権社会の創造に向けて、常に具体的課題と向き合い、時に右往左往し、時代状況の中で不十分ながらも一つの答えを導き出さねばならない自治体職員としての視点である。人間を最大限尊重する社会を求めること、そうであるがゆえに、それは常に未完であり永続的な改革を必要とする。スウェーデンの社会、そして今回取り上げたヨーテボリ市も、もとより完全なものではない。だが、そこには常に現実社会から課題をえぐり出し、理想に向けて現実と格闘する姿がある。

—まえがきより



太田 猛彦

『森林飽和 国土の変貌を考える』 NHK ブックス

私たちが緑でいっぱいの山々を見るとき、そこが五十年前に「はげ山」であった姿を想像できるだろうか？山の地肌が見えなくなり、土砂崩れが減り、川から砂が消える—これらはすべて二十世紀に起きた、日本史上初の「事件」だった。変化は副作用をもたらす。サルヤクマが人里へ出没し、竹やぶが広がり、砂浜が流失して海岸の道路が崩壊する。こうした問題の根源に「山地の変化」があることを見抜き、土砂の流れを分析して私たちの誤った思い込みを次々と覆す。自然環境と災害に対して発想の転換を迫る提言の書。

—表紙カバーより